

CITATION: Farina N, Isaac MGEKN, Clark AR, Rusted J, Tabet N. Vitamin E for Alzheimer's dementia and mild cognitive impairment *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2012, Issue 11. Art. No.: CD002854. DOI: 10.1002/14651858.CD002854.pub3.
CRG名: Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Group.

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 25 June 2012
Clib issue No.; N/U: 2012 Issue 11; Update

アブストラクト

背景: ビタミンEは、毒性のあるフリーラジカルを除去する抗酸化物質として機能する食品中の一成分です。フリーラジカルがアルツハイマー病などの認知障害の病理過程の一因であるというエビデンスにより、軽度認知障害(MCI)およびアルツハイマー型認知症(AD)の治療において、ビタミンEの使用に関心が高まっている。

目的: ADの治療およびMCIの認知症への進行予防におけるビタミンEの有効性を評価すること。

検索戦略: 「ビタミンE」、ビタミンE、アルファトコフェロールの用語を用いて、2012年6月25日にSpecialized Register of the Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Group(ALOIS)、コクラン・ライブラリ、MEDLINE、EMBASE、PsycINFO、CINAHL、LILACS、ならびに多数の試験データベースおよび灰色文献源を検索した。

選択基準: ADおよびMCI患者に対し、用量を問わずビタミンE投与をプラセボと比較しているすべての交絡のない二重盲検ランダム化試験。

データ収集と分析: 2名のレビューアが別々に選択基準を適用して研究の質を評価し、データを抽出・解析した。ランダム化した各患者について、各アウトカム指標のデータを求めた。そのようなデータが得られない場合は、投与を完了した患者の解析を実施した。比較可能なアウトカム指標がなかったため、研究間のデータ統合はできなかった。

主な結果: 3件の研究のみが選択基準を満たし、2件はAD集団、1件はMCI集団を対象としていた。AD研究の1件目(Sano, 1996年)において著者らの報告によると、死亡、施設収容性社会不適応、Clinical Dementia Rating(CDR)の3ポイントの変化、あるいは2つの基本的日常生活活動の2年以内の喪失といういずれかのエンドポイントに達した被験者が少なかったというビタミンE(2000 IU/日)の利益がある程度みられた。投与完了患者のうち、プラセボ投与患者74%(58/78)に比べてビタミンE投与患者では58%(45/77)がエンドポイントのうち1つに到達した[オッズ比(OR)0.49、95%信頼区間(CI)0.25~0.96]。AD治療研究の2件目(Lloret, 2009年)は、酸化ストレスレベルに関連した認知の進行に対するビタミンE(800 IU/日)の効果を検討した。ビタミンEにより酸化ストレスマーカーが減少した患者では、プラセボ群に比べて、ベースラインと6カ月時とのMini-Mental State Examination(MMSE)スコアの変化率に有意差は示されなかった。MCI研究(Petersen, 2005年)の主要目的は、MCIからpossible ADまたはprobable ADへの進行までの時間に対するビタミンE(2000 IU/日)の効果を検討することであった。被験者769名中総数214名が認知症に進行し、212名がpossible ADまたはprobable ADと分類された。ビタミンE群とプラセボ群とにMCIからADへの進行率に有意差はなかった(ハザード比1.02、95%CI 0.74~1.41、P = 0.91)。

レビューアの結論: ADまたはMCIの治療においてビタミンEによる利益があるという説得力あるエビデンスはなかった。ADにおけるビタミンE投与を評価する今後の試験では、アルファトコフェロールに限定するべきではない。

平易な要約(Plain language summary)

軽度認知障害(MCI)およびアルツハイマー型認知症(AD)の治療に対し、ビタミンEを使用すべきではありません

ビタミンEは強い抗酸化物質をもつ食品中の一成分です。ビタミンEは、ADでみられる損傷の原因となるいくつかの毒性化学物質に作用することが示されています。多くの臨床検査研究、動物研究、疫学的研究により、ADの予防と治療においてビタミンEが有益な役割を担う可能性が指摘されています。しかし、今日までビタミンEのルーチンの使用を裏付ける、ヒトでのエビデンスは非常に限られたものしかありません。さらに、近年では、ビタミンEには重篤な副作用があり、死亡率が高くなる可能性までであると示唆するエビデンスが注目されています。このレビューでは、3件の研究が同定され、これらではMCIおよびADにおけるビタミンEについて、利益がないか、もしくは限られた利益しかないことが示されました。したがって、MCIまたはADの治療にビタミンEを使用すべきではありません。もっと試験が必要ですが、それには別の形のビタミンEを含むようにすべきです。

(監訳 大神 英一)

翻訳公開日:2014年 1月 28日

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。